

第70回「資本論を読む会」 (第2巻第1章 - 新規参加歓迎です!)

12月は『クリスマス学習会』

- ・12月25日(水曜日)
 - ・午後6時30分からZoomで開催
- 資本論 第2巻第1章「貨幣資本の循環」

[岩波文庫(四)p41-]。

資本論第2巻がスタートしました。11月26日の「資本論を読む会」は11名参加。エンゲルスの書いた序文をやりました。レポートは座長のTabéさん。マルクスは1818年5月5日生まれ(子供の日!)、83年3月没(65歳)でした。この第2巻は没後の85年発行ですから、序文はエンゲルスが、マルクスが残したたくさんの手稿を整理して、第2巻にまとめるにあたっての「苦労話」(?)から始まります。

このエンゲルスの序文のメインストーリーは、「マルクスは私の剰余価値理論を剽窃した(盗んだ)」と宣言したロドベルトゥスという人に対する批判です。マルクスに至る古典派経済学(アダム・スミスからリカードなど)の剰余価値理論(資本主義システムによる労働者搾取の経済学等)を歴史的にも解説する内容になっています。

30ページほどあるので、読み合わせで1時間ほどかかりました。余り討論時間はありませんでしたが、あらためてマルクスの書いた資本論というものの意義を勉強する機会となったと思います。

次回は「この分冊より『資本の流過程』に入る」とされる本文に入ります。第2巻第1篇・資本の諸変態とそれらの循環、「第1章・貨幣資本の循環」、レポーターはKaiさん。日程が12月25日のクリスマスとなりました。皆さん「特に予定はない」という年頃?なのですぐに決まりました。

懇親会では、総選挙総括のあれこれ(SNS選挙論、少数与党政権論、移民問題、斉藤幸平、惜敗率など)、とりとめなく議論が続き、適当に解散となりました。

第2巻からでも、一緒に読んでみたいという方はいませんか!? 岩波文庫版(四)さえあれば、今からでも全然面倒なことはありませんヨ。歓迎します。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから-Tabéさん

資本論第二巻 エンゲルスの序文

・マルクス没(1881.3.)後に残された遺稿は、経済学批判ノート23冊で、同じ題で刊行された「経済学批判」(1859.6)の続き。第二冊(巻)のための草稿は四つ。1870~病状による休止期、種々の研究。

・ロドベルトゥスのマルクスへの剽窃非難—自分が剰余価値理論の実際の創始者で、マルクスは自分を剽窃したと宣言。彼は、賃料(彼は地代と利潤を一緒)は商品価値への「価値追加」からではなく、「労働賃金の受ける価値控除の結果として生じる。言い換えれば、労働賃金が労働生産物の価値の一部を占めるにすぎないから、」「賃料(彼は全剰余価値の意味に用いる)は、ただ不払い労働に、または不払い労働を表示する生産物に等しいという重要な結論に達する。」

・これに対し、マルクスは剰余価値は生産手段の所有者によって、等価を支払うことなく獲得される価値総額の一般的形態であって、マルクスによって初めて発見された全く独特な諸法則にしたがって利潤や地代という特殊の転化された形態に分歧する。(これらの法則は第三冊で展開)

・資本家の剰余価値はどこから生ずるか、さらに土地所有者のそれがどこから生ずるかも、A・スミスはすでに知っていた。

・リカードは、A・スミスよりもかなり前進する。彼は商品において実現された労働量による商品価値の規定から、労働によって原料に付加された価値量の労働者と資本家との分配を、労働賃金と利潤(すなわち剰余価値)への分配を導き出す。

・ロドベルトゥスが最後まで理解しなかった一点—(マルクスが研究した)労働の価値形性的性質。いかなる労働が、何ゆえに、いかにして、価値を形成するか。価値なるものは、労働の凝固したものに他ならない。

・不変資本と可変資本との区別—先行者の何人も成就しえなかった資本の一つの区別、ロドベルトゥスもブルジョワ経済学者たちもなしえなかった、もっとも複雑な諸問題の解決のための鍵を提供する区別を確立した。

・剰余価値の両形態—絶対的および相対的剰余価値、その役割の論証。労働賃金理論の展開。資本主義的蓄積の歴史の概要、蓄積の歴史的傾向の叙述。

・ロドベルトゥスは、かれの剰余価値「賃料」において、一つの陳腐なものを再発見したに過ぎない。彼が剰余価値を一つのユートピアに作り上げたことは、マルクスによって「哲学の貧困」の中で批判されている。

DAS KAPITAL

Merry Christmas

12.25

#70

読む会

第2巻Start!